

(事後評価)

ダイオキシン類と多環芳香族炭化水素類の 複合毒性の評価に関する研究

(研究期間：平成11年～13年度)

任期付研究員：宮原 裕一（独立行政法人国立環境研究所）

総評（一定の成果が得られた研究であった）

本研究は、ディーゼル排気ガス（DE）中のダイオキシン類及び多環芳香族炭化水素類（PAHs）の生体内動態と酸化ストレスとの因果関係を解明し、それらの曝露評価に必要な簡易大気モニタリング手法を開発することを目的とするものである。

当初4年間にわたる研究計画であったが、任期付研究員が諸事情により2年半で他の研究機関に移ったこともあり、本制度を十分に活用できず、複合毒性の解明に至らなかった点は残念であるが、DE中のダイオキシン類・PAHs組成が明らかになるなど一定の研究成果が得られており、また、地道な研究を通じて基礎的なデータが得られていることから、今後、本研究の更なる発展が期待される。

他方、任期付研究員の活用効果については、本研究及び任期付研究員本人のそれまでの研究実績が評価され、国立大学助教授として異動するなど、研究員の流動化が促進され、研究活動の活性化に寄与するなどの効果があったものと考えられる。また、研究を効率的に進めるため、若手の実験補助員を配置するなど、研究所の任期付研究員に対する支援は十分に行われている。

以上により、本研究は、総合的に一定の成果が得られた研究であったと評価できる。

<総合評価：b>

評価結果

総合	1.目標達成度	2.目標設定	3.研究成果			4.任期制	
			1.科学価値	2.科学的波及効果	3.情報発信	1.活用効果	2.機関支援
b	b	a	b	b	b	b	a